「大器晩成」と「無用の用」

図書館長　村上　純一

最近，テレビ番組やゲーム機で熟語のクイズが流行している。出題率の高い四文字熟語の 1 つに，卒業式などで学生へのはなむけの言葉としてよく使われる「大器晩成」がある。卒業時に贈られるのは，「この学校では大成しなかったけれど，次では頑張りなさい」ということでもあるから喜んでもいられないが，この言葉は，古代中国の老子の言葉とされている。老子は，書物としての「老子」を書いた人物であり，司馬遷の「史記」によれば，戦国時代の楚の人，名は耳，字はタン，周の国の図書館の役人というから，架空の人物ではなさそうである。早速，図書館の蔵書検索で探してみると，本校には関係図書が 10 冊あり，E-Conan 蔵書検索という機能で長岡技術科学大学と 42 高専の蔵書検索を行うと 448 冊見つかった。各校に平均して 10 冊以上あることから，関心の高さが窺える。

「道徳経」とも呼ばれる「老子」は，実在した人物である老タンの著作であるとしても，約 2400 年前の戦国時代から現代に伝わる過程で散逸したり，後代の学者が注釈，加筆したため原文の正確なことは分らない。世界史の復習となるが，周の国でクーデターが起こり，都が移された紀元前 770 年から秦の始皇帝が中国を統一する紀元前 221 年までを春秋・戦国時代と呼ぶ。日本の戦国時代より遙かに長い戦乱のこの時代には，陰陽家，儒家，墨家，法家，名家，道家などの諸子百家の思想が現れた。老子は荘子とともに，老荘思想と呼ぶ道家の思想家であり「無為自然」を説くとされている。先の「史記」が 52 万字以上の大作であるのに対して，「老子」は約 5000 字の小品である。第 41 章に諺として現れる「大器晩成」は，元は，大きな青銅器は製作に時間がかかるという至極もっともな意味であったらしいが，後世に転じて人物に対して使われる言葉となった。

技術者は，自然科学や専門科目を長時間学び，新発明の製品を作ろうと躍起になる。工夫に工夫を重ねて，性能を向上させ，ライバルに打ち勝つ努力を惜しまない。製品が市場に投入されれば，その対価を再投資して，さらに改良を続けなければならない。最初は，大きな夢を抱いて全力で突き進んでいても，いずれは疲れ果ててしまう。壁にぶつかったとき，心の平衡を保ってくれるのは，古人の知恵である。そんなとき「老子」に出会う。

「老子」は難解な書である。どうやら「道（タオ)」を至上原理と説いているらしいが，知識，合理性，利益に価値をおく現代人の感覚では掴みきれない。「老子」は，国家や文明すら否定している。社会的人間としての活動一切を否定する思想は，仏教の「空」に近い。頭で理解しようとしても理解できないのではないかと思う。ある種の瞑想の境地であろうか。しかし，利益追求型の現代人の切実な悩みを「そんなん捨てなはれ」とあっさり切り捨ててくれ，「用の無い物の中に有用なものがあるんですよ」と人を煙に巻くような優しくも小気味よい説得力に魅力は尽きない。座右の書としたい 1 冊である。

前任の高吉先生から引き継ぎ，この 3 年間，身のほど知らずにも図書館長を引き受けて

きた。小さな成果として，自習室や新書版コーナーなどを整備でき，蔵書数も 9 万冊に達した。しかし，図書館をよりよくしたいという思いを具体化できなかった点は反省点である。低学年の貸出冊数が大幅に落ち込んだままであるのは残念である。私も，館長卒業に際して上述の意味での「大器晩成」を贈られる身であろうが，「無用の用」であったのだと納得していただきたい。今年 10 月には，新たに香川高専詫間キャンパス図書館として再出発の予定である。本校図書館の益々の発展を祈りたい。